

月刊

JMITU

労心か

新型コロナ対応版



11月号

日本金属製造情報通信労働組合大田地域支部
セガグループ分会 2021年発行

No.443

秋闘・年末一時金妥結

私達労働組合は秋闘・年末一時金妥結いたしました。

一時金計算式(セガとSLSでは賞与評価ポイント表が違います)

は以下のとおりです。

2021年年末一時金

セガ

1. 一般正社員 (MS格以下)

(1)評価期間在籍6カ月以上の一般正社員に対し、資格別賞与固定額に家族手当を加算した額に対し係数2.0を基準とした賞与額(一人平均767,474円)を次のとおり、支給する。

$$\text{支給額} = [\text{資格別基準額 (別表1)} + \text{家族手当}] \times 2.0 + \text{人事評価額} - \text{勤怠評価額}$$

(i)上式中の「人事評価」による金額は次の方法で算出する。

$$\text{人事評価額} = \text{評価ポイント単価} \times \text{個人評価ポイント (別表2)}$$

評価ポイント単価は、原則として本部・事業部別に設定した賞与原資額を、本部・事業部の人員の個人評価ポイントの総計で割ることにより算出する。

別表1. 賞与資格別基準額

	資格別基準額
MS2	220,000
MS1	200,000
A2	160,000
A1	140,000



別表2. 賞与評価ポイント

評価	S	A+	A	B+	B	B-	C
MS2	275	245	215	185	155	125	95
MS1	228	203	178	153	128	103	78
A2	190	170	150	130	110	90	70
A1	170	150	130	110	90	70	50

支給日 2021年12月3日(金)

SLS

1. 一般正社員（MS格以下）

(1) 評価期間在籍6カ月以上の一般正社員に対し、資格別賞与固定額に家族手当を加算した額に対し係数1.75を基準とした金額に人事評価および勤怠評価額を加減算した賞与額（一人平均627,000円）を次のとおり、支給する。

$$\text{支給額} = [\text{資格別基準額 (別表1)} + \text{家族手当}] \times 1.75 + \text{人事評価額} - \text{勤怠評価額}$$

(i) 上式中の「人事評価」による金額は次の方法で算出する。

$$\text{人事評価額} = \text{評価ポイント単価} \times \text{個人評価ポイント (別表2)}$$

評価ポイント単価は、原則として全社に設定した賞与原資額を、全社人員の個人評価ポイントの総計で割ることにより算出する。

別表1. 賞与資格別基準額

	資格別基準額
MS2	220,000
MS1	200,000
A2	160,000
A1	140,000



別表2. 賞与評価ポイント

評価	4	3	2	1(標準)	0	-1	-2
MS2	260	230	200	170	140	110	80
MS1	215	190	165	140	115	90	65
A2	180	160	140	120	100	80	60
A1	160	140	120	100	80	60	40

支給日 2021年12月3日(金)

掌編小説

親ガチャ

仙洞田一彦

五歳の娘を基準にすると我が家は、パパとママ、そしてジイジの四人暮らし。ジイジはパパのパパで、パパのママつまりバアバは少し前にお墓に入っていて今はいない。

パパ、つまりわたしは日曜日の昼少し前、リビングのテーブルの上一杯に新聞をひろげて読んでいた。妻は娘と近所に買い物に出ていた。

ジイジが入って来て、わたしの向かい側に腰掛けた。バアバが生きていた頃は三階でジイジとバアバ二人で暮らしていた。今はジイジ一人、三階で暮らしていて、食事のとき以外は、あまり降りてこな

い。わたし夫婦と娘の三人の生活空間は一階と二階。五歳の娘はよく三階に行くが、わたしとママは三階に上がることはほとんどない。わたし夫婦は共働き、娘は保育園で、普段の日、昼は家にいないので、昼はジイジの一人暮らし。

ジイジは年齢からするとちよつと早いのではないかと思うが、最近ボケて来たよう一人で置いておくのが心配になってきた。とはいっても生活のために、共働きは止められない。

わたしの向かいに腰掛けたジイジが吐き出すように言った。興奮している様子で、幾分顔が赤い。

「俺に責任はない」
強い言葉にわたしは思わず目を瞠った。そして、広げて

あつた新聞を畳んだ。最近の出来事を振り返って見たが、ジイジの責任を追及したような出来事はなかった。食事時ご飯粒やおかずをテーブルの上にこぼすことが増えてきたように感じたが、口に出して注意したことはなかった。そのことでママに「ジイジも年を取ったなあ」と感想を言ったことはあるかもしれないが、ジイジのいる前では言っていないはずだ。わたしは聞いた。

「何の責任」
ジイジが答えた。

「お前たちの生活が大変なのは分かるが、俺だけの責任ではない。俺のオヤジ、つまりお前のお爺ちゃんにも責任がある」

ジイジの言い方が少し弱くなった。すぐに頭に血がのぼ

るが、衰えのせいか下がるのも早いようだ。

「共働きは、今どき仕方ないよ。ジイジの責任だなんて思っていないよ」

何がどうなつて、こういう話になつたのか、まだはつきりしないが生活のことらしい。生活費のことを言えば、ジイジの年金は、ジイジの生活費に足りないくらいだ。不足分は共働きの収入で補っている。とりあえず答えた。

「仕方ない、そうだよなあ」
ジイジは呟くように言うのと、目を閉じ上を向いて、何かを思っているような顔をして言った。

「いや、仕方ないじゃない。今どき普通だよ」

わたしはジイジの気持ちの負担を軽くするように言った。

わたしの言葉に答えず、ジイジは言った。

「俺の父親は戦争に行つて病気をした。戦争は終わったけれど、病気は体の中に残っていて、戦後思うように働けなかった。戦争でぼろもうけた奴らもいたけど、俺の父親、お前の祖父は並みに働くことができない身体にさせられてしまった。だからずっと貧乏だった。その貧乏がお前にも響いた。それが今になってミナちゃんにも響いているんだな」

ジイジが「ミナ」と言ったところで涙ぐんだ。ミナというのは五歳の娘の名前。ジイジからは孫にあたる。

ミナがジイジに何か言ったのかも知れない。まさか責任追及をするわけではないと思う

が、何を言ったか分からない。が、五歳くらいでは思ったことをそのまま言うので、言われた方はかえって応えるかも知れない。言った五歳は、その言葉がどんな影響を与えるかは推し量れない。

ジイジが降りて来た時間からすると朝のテレビで気になる話題でもやっていたのだろう。それでたまらず、三階から二階に降りて来たのだろう。脳が弱ってきているジイジの頭に刷り込まれてしまったのかも知れないが、こんな言葉を繰り返されてはたまらない。「ジイジが責任を感じることはないよ」

わたしはジイジに、思いっきりやさしく言った。「そうか、そう言ってくれようれしいよ。でもミナちゃん

んがなあ」

「ミナなんか、まだそんなこと分かるわけないよ」

「そうかあ」

ジイジはそういつて立ち上がる、部屋を出て行った。すぐに階段をゆつくり上るらしい、板のきしんだ音が聞こえてきた。

「ただいま」と言つて、ママとミナが買い物から帰つて来た。わたしはママにジイジの話をした。ママが言つた。

「親ガチャのことかなあ。保育園でその言葉が流行っているから」

「親ガチャ」

言つてから、わたしは思わず笑つた。そばで親の話を聞いていたミナが言つた。

「ジイジが親ガチャって何だつて聞くから、わたし、ジイ

ジに教えてあげたの。親ガチャつてのは子供は親を選べないってことだつて」

「ミナが」

ママとわたし、一緒に声を上げ、顔を見合わせた。

「ほら、パパとママが言い合ひをしてたじゃない」

ミナから言われて、夫婦喧嘩とまではいかないが、昨夜のことを思い出した。住宅ローン返済の話だ。ジイジもつとお金を出してくれていたら、わたしたちがこんなに苦しまなくても良かったという話だ。愚痴っぽい話で、子供の前ですべきではないけど、五歳だから何を話しているか分からないだろうと思つていた。ママとの会話の中で親ガチャなんていう言葉が出たかどうか覚えていない。

「なんて話したの」

ママがミナに聞いた。

「いいよ、いいよ」

ミナがジイジにどう話したか興味はあったが、これ以上突っ込まない方がいいような気がした。またジイジに何か言って、傷口を大きくするかも知れない。

「わたしねえ、貧乏はいやだつてジイジに言ったの」

ミナは答えた。

「そうよねえ、貧乏はいやだよねえ。ママもそう思う」

ママが答えた。ミナが貧乏なんてどういうことか分からないはずだとわたしは思った。ママの言い方は、わたしへの当てつけのように聞こえた。

ママとわたしが昼食後、くつろいでテレビを見ていた。

ミナは二人の見えるところのカーペットの上で人形をいくつも出して遊んでいた。人形を両手に持って、会話させていた。それぞれの人形に役を振ってあるのだろう。ミナが一人二役、三役している。

左手に握った人形を少し振りながら言った。シンデレラの話らしい。

「シンデレラ。あなたは家でお掃除、お洗濯していなさい」

今度は右手の人形を少し振りながら言った。

「わたしも舞踏会につれてつて」

「だめ」

ミナは握った人形を、左右交互に振りながらセリフを言う。

「もう魔法使いのお婆さんはいないのよ。バアバはお墓の

なか。だからシンデレラにはきれいな着物もカボチャの馬車も現れないの。ずっとずっと家でお掃除とお洗濯よ」

今度はミナが右手に握った人形に向かって、言い聞かせるように言っている。

その時、ママがテーブルの下で私をつついた。ママの視線が動いて、ミナの方を見ると合図した。わたしも気づいて見ていた。ママがミナに話し掛けた。

「シンデレラさん、舞踏会に行けなくてかわいそうね」

「シンデレラの本当のお母さん死んじゃったでしょう。親ガチャだから、かわいそうなの」

ミナが答えた。

「ジイジが教えてくれたの」
わたしはミナに聞いた。ジ

イジは脳が弱っているから、孫に変なことを教えたのだからと推測した。

ミナは首を横に振って答えた。

「ううん、違う。ジイジにやっつけて見せてあげたの」